



TITLE:

質疑應答

AUTHOR(S):

CITATION:

質疑應答. 地球 1925, 3(3): 409-412

ISSUE DATE:

1925-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182829>

RIGHT:

に於ける状態である愉快な事には由の手臺地の溪谷より連立して深く浸蝕せられた三條の狭長なる溪谷が発見された、一は不忍池から本郷臺の東麓に滑ひて南下するもの、一は江戸川下流から駿河臺麹町臺の間を通つて日比谷、芝に通ずるもの、一は芝松本町から第六臺場の方へ行くもの、三つで、これが往時の河床であるとする、第三紀以後恐らく洪積世のある期間内に、東京の地盤が現在よりも二十米以上隆起したことがあり、やがて沖積世に沈降したと見らるゝのであつて、この沖積層の特に深い部分の上に居住するものは建築上幾分の注意を加へればならぬのであらう。予はかゝる有益な基本的の報告が愈多く提供せられんことを望み井上禮之助氏清野信雄氏等當事者諸君の勞を多とする。(藤田)

○半歳で世界一周

武用種吉著

京都 内外出版株式會社發行 定價貳圓

本書は大正十二年七月下旬著者が横濱埠頭を離れてより、先づ米國の西海岸に渡り、ワシントン大學、シカゴ、ナイアガラ瀑布、ニッヨーク、ワシントンやボストンの各地を巡りて英國に渡航し、僅に半歳の短き日子を以て、自耳聾、和蘭、獨逸、佛蘭西、瑞西、モナコ、伊太利、境太利、匈牙利、エジプトの諸國を歴遊した間の犀利なる見聞や感想を口語體で平易に且つ面白く書き列れた二百三十頁の小冊子であつて、歐米諸國の世界大戰後の實況を手に取る如く窺知する事が出来るのみならず各國の人情、風俗、習慣や、旅行者が經驗すべき普通の事項で其場に臨まれば一寸氣の附かぬ様な事までも、忠實親切に書き

込であるから、一面からは氣の利いた案内記とも見らるゝ、數多の挿圖は全部寫真銅版で紙が善いので鮮明である、匈牙利の記事中の人種系統や、ギリシアに於ける考古談に著者造詣の一端を伺ふ事が出来るのみならず、卷末の講演で著者の世界婦人觀を知る事が出来る、又處々に挿入せられた著者の詠歌は即興的に實況を描寫したもので、膝栗毛的の失敗談と共に、野趣津々たるものがある、兎に角少しも倦怠を感ずることなく通讀したる面白い小冊子で、携帯にも便であり、旅行者、遊覽客等の好伴侶である。(石川)

質疑應答

文檢の問題中二三をお答します。

問 比律賓の住民

答 比律賓島の現住人口は約八百萬で之を其の渡來年代順に述べる、最も早く此島を占據したのはネグリート(Negritos)人種であつた様である。後馬來人種の一類たるエポラト(Lolo)族が海を踰えて來り、ネグリートを山中に驅逐して自ら海岸の平野を占領したが其の後更に優良なマカローグ(Macarongs)其の他の馬來人種が侵來しエポロット族をしてネグリート人の跡を追ひて山中に退かしめ海岸の平野に據つて全島の主となつた。其の後回教が馬來半島より瓜哇一帶の地に宏布するや回教徒たる馬來人即ち今のモロー(Moro)族は南方より來つてミ

ンダナオに據り北上して非ザヤン群島より呂宋に迫り一時は馬尼刺市を占領したが時偶々西班牙人が東漸しモロー族は南方に追はれミンダナオ、ブールを領して今日に至つた。

此等の人種を人種學上より分類すれば黒色人種と褐色人種となるネグリトは前者に屬し爾餘の各人種は後者に屬する。

更に之を宗教の別に從つて區別すれば基督教族及び非基督教族に分つ事が出来る。普通には律賓人と呼ばれるのは基督教族であつて比律賓獨立問題の如きも悉く此の人種のみに限られた問題であつた。全人口の八分七を占め大約七百萬を號して居る之を細別すれば

タガローグ Tagalogs 馬尼刺附近の沃野に占據す

非ザヤン Visayans 非ザヤン群島

イロカノ Ilocanos 呂宋西北海岸イロカノ州

ピニール Binis 呂宋東南角マヨン山附近

パムパンガ Pampangos 馬尼刺北方の同名州

此の内タガローグ人は其の地理的關係と政治的能力とを以て群島中最も重きをなし、非ザヤン族は其の人口を以て甚だ勢力を有して居る。イロカノ族は南北二百哩東西十哩程の狭小なイロコス州に住する結果銳意産業に力を注ぎ航海通商を以て現はれて居る。パムパンガ族は人口寡きに拘らず最も誇るべき歴史を有して居る。群島中唯一の尙武國民で十七世紀の交和蘭軍隊に投じて瓜哇に轉戦し十八世紀にはアンダ將軍を援けて英國に抗し十九世紀にはゴルドン將軍の軍に加はつて支那に戦つた。今日も米國陸軍に投ずるものは此の族に最も多い。

上記西班牙國教に歸依した種族以外のものを非基督教族とし其の數大約百萬に達し、モロー族を除いては基督教族の壓迫を被つて山中に遷徙し文化の進まない野蠻人である。

(イ)ネグリト族(Negritos) 後來の諸人種に追はれて山間に退却し、弓矢を以て狩獵し性甚だ怯懦で外人と見れば山間樹林の内に遁風する。身體は矮小で毛髪は黒く縮れ皮膚も漆黒で亞弗利加の蠻人に酷似して居る。智識の程度低く教化の見込はない。呂宋、ネグロス、パネー、パラワンの山中及びミンダナ島の東北方に居住し各地に散布し人口或は八萬と云ひ或は二萬五千と謂ふ。

(ロ)モロー族(Moros) 回教を信する慍悍な馬來人種で最も遅く本島に渡來した。西班牙は本國のムーア人を連想してモローと呼んだ。船を操る事が巧みで海賊を業とし屢々北上して西班牙を苦しめた。歴代の總督は敬遠主義を取り根本的退治の策を採らなかつたからミンダナオ、ブール、パラワンの諸島に據つて威を内外に振つた。十九世紀に入り汽船の發明あるに及んで漸く西人に察覺せしめられたが全く歸順するに至らなかつた。米領後も數年其の討伐に苦心したが今日は漸く靜謐に歸しミンダナオ島も軍政を撤するに至つた。人口三十萬に及び勢力は非基督教族中の首位にある。

(ハ)イゴット族(Igots) 呂宋北方の山岳州に住し、人口十八萬、モロー族に次で非基督教族中の優勢人種である。近年迄は山中に於て部落相互に首狩を行つたが近年漸く文化に浴して溫良な民と化した。バギオ附近の住民は米國の教育普及の

結果進歩の見るべきものがあるが北方ホントック附近の同族は尙舊習を脱せず殺伐である。常食は薩摩芋、里芋、米であるが平野を有しないから三千尺四千尺の高山を開墾して階段式水田を作り米の栽植を爲して居る。又犬の肉を嗜好するのが特色でバギオの市場は日曜日毎に犬賣賣のイゴロット人が聚集する。

(ニ)イフガオ族(Iugaos) イフガオ附屬州よりバギオ附近に住する。イゴロット同様首狩人種であつたが今は歸順して平和の民を爲つた。其の數十二萬五千農を業とする。

(ホ)カリンガ族(Kalings) 其の數七萬六千、カリンガ附屬州に在り首狩人種であつたが山中遠隔地にある者の外は溫良な農夫となつた。

(ハ)其の他 呂宋山岳州のイロンゴット(Ilongots)、チンギアン族(Tingians)、ミンダオ山中のマノボス(Manobos)、バゴボス(Bagobos)、ブキドノンス(Bukidnons)、ウィンドロ島及びパラワン島のマンザアン族(Mangyans)等がある。

以上は比律賓の土人であるが其の外西班牙人の子孫亞米利加人の居る事は勿論であるし又少數の支那人日本人がある事も勿論である。日本人の根據地はミンダオ島のタラウ灣に臨んだロパパカであつて、此處には馬尼刺麻栽培事業が經營せられて居る。

邦文にて比律賓の事を書いたものでは鶴見祐輔氏の南洋遊記が最も詳細且要を盡して居る。少くとも比律賓の人種に就ては然りである。其の他文學博士原勝郎著南海一見、土屋元作者比

律賓跋涉、南洋貿易調査會編南洋之寶庫等を参照する事が出来る。歐文のものでは Charles Burke Elliott 著 The Philippines (一九一六年版)が最もよく人種に關しては同書八〇頁以下を参照するがよい。

問 川邊特別區域

答 四川西部打箭爐以西は清代に於ても永く西藏に屬せしが、乾隆以後西藏の服屬に従ひ、漸次此間に支那官府の力を及ぼせり。然れども猶西藏交通路の驛站として之を支配せしに止まり行政に就きては見るべきものなかりしなり、清末に至り西藏の達賴喇嘛獨立し清の藩屬より脱するあり。是に於て之を控制する爲め打箭爐以西、西藏東部に川邊なる一區域を設け、別に大官を派遣して之を管理せしむ。革命後之を繼承し之を川邊特別行政とし鎮守使及道尹を置き其下に三十三縣を新設せり。康定、雅安、安良、湊定、雅江、道孚、理化、瞻化、稻成、貢噶、薩敦、鹽井、甘孜、勉雅、丹巴、定鄉、德榮、昌都、武成、寧靜、察雅、貢、察隅、科麥、恩達、鄧柯、石渠、白玉、德格、同善、碩督、嘉黎、太昭これなり、この中大昭縣と云ふは尼洋河上にあり拉薩に近く其距離三百支那里にすぎず。

問 ドアルゲヤ Dobudja

答 ドアルゲヤはルーマニア國の南東部を占め、バルカン山脈の東方ブルガリアより北に延びたる丘陵地のために、ダニュープ川は歪矩形に彎曲して黒海に注ぐこの河道を自然の北及西の境とし、東は黒海に濱し、南はブルガリアに境す、この南の境界線は一九一三年第二バルカン戰爭の結果ブカレスト條約によ

りて確定せられたる一線にし、其以前は今日の線よりも平均三十哩程北にありき、この方面に於ける自然の境界をなすものはブルガリアの東北部を横ざりて西北より東南に連互する不毛の丘陵 Delian 山地にして黒海岸バルナ港よりダニユウ川畔のルスチユク河港への鐵道線路は其の南を限れり、この山地の最高點は一六二四呎に達す。而してこの山地より北方に連互せる老年性の高原ありてダニユウ川の屈曲點に達する迄をドアルヂア臺地といふ。ドアルヂアの地勢は自から四區に分たる第一はテリオルマンに近きステツブ狀の高原にして南部中部に位し第二は北西部ダニユウ川の屈曲點に近き山岳地、第三は黒海岸低地にして多數のラグーンを有する地方、第四はダニユウ川のデルタ地方これ也。尤も肥沃なるは南部臺にして地穀物を主産とする農耕地なるが國の中央部 *Central* に達する迄緩傾斜をなせり。但しメギテア附近は石灰質の墟垣より成立し土地瘠せたり。かゝる瘠せたる地質は中央部より更に北方に擴がり、北西山地に至れば最高一千尺に達して森林繁茂す。ダニユウ川のデルタはキリア川スリナ川及セントジョルヂ川三分流の間にあり洪水の氾濫たえず晩春初夏の候には一面の湖水化し初秋に至り減水すれば牧草を生ずるにより九月より四月までの間、臺地に住める土民の遊牧地と化すること多く、沿河の民は漁業によりて生活せり、蓋し中部以北は不毛の地多きなり。

ドアルヂアの有名になりしは一八七八年の露土戰爭以來のことにして、露西亞がルーマニアの領土たりしベッサラビアの肥沃地を併合し、其賠償としてドアルヂアをルーマニアに與へた。

るに始まる。蓋しこの地古來より北方の蠻族がローマ帝國の東方富饒の都コンスタンチノーブルに侵入する道路に當りたればゴート、スラヴ、タタール、いづれも侵入の歴史あり、トラヤヌ皇帝はこれらの夷狄に對抗して有名なるトラヤヌ長城を建築せり、實に紀元前百〇六年のことにして現今のコンスタンツアよりダニユウ川畔へかけて、この地方の尤もくひれたる所に高さ六十呎申二十呎の城壁を設けたる也。現在この部分に鐵道あり。露西亞の侵入は、同じスラヴ族ブルガリアのために一八一二年の地方を經過して土耳其に攻め入りしが、世界大戰に際してマッケンゼン將軍の下に獨逸及ブルガリア連合軍はこの地方に侵入し、ルーマニア軍を退去せしめたることあり。一般に降雨量少く、河流も自から少き故に土地の大部分は乾燥不毛なれば、夏期は屢黃塵天を蔽ひ冬は寒風吹きすさむ、鐵産には花崗産、赤鐵鑛銅鑛を含み、少量の石灰あれども何れも採行されず、たゞ南部の農業のみ有望なり、一九一三年にブルガリアよりこれをルーマニアに還附したるがコンスタンツアの附近に近時開鑿の業起りたるも見込少し、中部北部の牧場の産出する羊皮羊毛の産多し、されどもルーマニアにざりては海への出口として重要な位置を占め、コンスタンツア港は同國唯一の開港地なれば首府アカレストとの間百四十哩に鐵道を通じ、この鐵道の西ダニユウ川を渡る所には、世界第一の長鐵橋（十二哩半）カロールブリッヂとて有名なるものを架したり、かくてルーマニアの石油輸出港としての設備も行届き、人口二萬八千に達し商業盛大なり、且又黒海岸の海水浴場地として有名なり。